研 究 成 果 情 報

令和元年度

春植えたまねぎの定植期を4月下旬まで延長させるための重要な技術的要件		
［要約］ 春植えたまねぎ栽培で、定植期を4月下旬まで延長させ、平均りん茎重 250g（目標収量4～5t/10a）を確保するためには、①は種時期、②苗質・苗姿、③定植晩限、④土壌水分等における技術的要件を満たすことが重要なポイントとなる。		
新潟県農業総合研究所園芸研究センター　育種栽培科	連絡先	TEL　0254-27-5555 FAX　0254-27-2659

［背景・ねらい］

たまねぎの春植えは、消雪日の変動や3月の天候により適期定植が難しく、性急なほ場準備と定植は収量の低下を招きやすい。そこで、ほ場準備が整えやすい4月下旬まで定植期を延長するための重要な技術的要件を明らかにし、春植えたまねぎの生産安定と拡大を図る。

［内容］

1　導入するメリットを得るための目標収量（出荷量）は、10a 当たり4～5tである（データ略）。
そのための収量構成要素は以下が想定される。

＊収量（4,068～5,069kg/10a）＝

22,000 株/10a（栽植株数）×86～96％（収穫株率）×86～96％（規格内りん茎率）×250g（平均りん茎重）

2　平均りん茎重 250gの確保には、以下の技術的要件を満たすことが重要なポイントである。

（1）　は種適期は 12 月第3半旬である。それより早いは種は、苗が老化するため4月下旬定植には適さない（データ略）。

（2）　苗の葉鞘径（えり部直下の短径）は、4月第6半旬の定植時点で 4.0mm 以上確保する（図1）。4月第1半旬時点で 3.0mm、4月第5半旬時点で 4.0mm 程度が目安となる。

（3）　定植晩限となる4月 28 日（図2）までに定植を完了する。ただし、4月第6半旬定植の苗の葉鞘径が 4.0mm 未満の場合は、3月第6半旬定植に比べてりん茎肥大が劣る（図1）。

（4）　6月中旬（りん茎肥大期）まで、畦間中央部の土壌水分がpF1.9～2.0 程度に十分確保されていること（図3）。

［導入効果］

たまねぎ生産収量の確保と適応地域の拡大

［導入対象］

たまねぎ生産者

［留意点］

1　春植えたまねぎ栽培は、平成 28 年度研究成果情報を参照する。

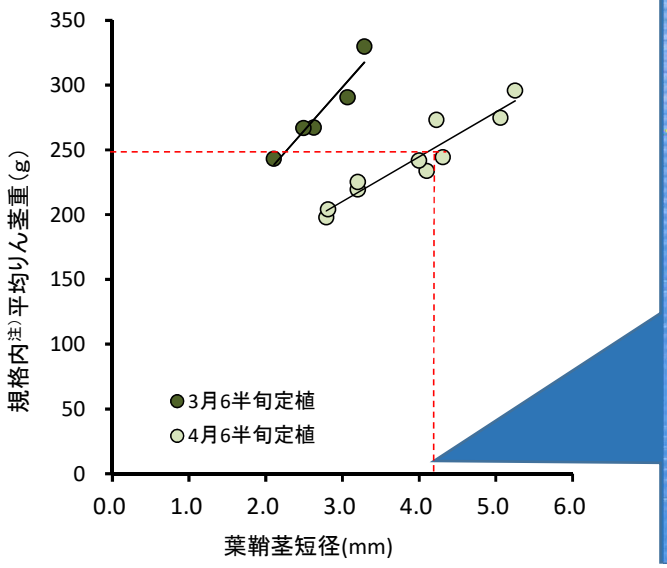
2　育苗は、は種以降全期間無加温パイプハウスで実施した。定植当日まで剪葉はしていない。

3　倒伏期は6月6半旬と梅雨時期になるため、倒伏後は速やかに収穫する。

4　水田転作地や転換畑の畦間かん水は、長期間の停滞水が無いよう排水性に十分留意する。

5　本技術を稲作の複合として導入する場合、定植作業が水稲作業と競合することが懸念されるので、計画的に導入する。

［具体的データ］



目標の苗姿（ハウスベンチ 12/13 は種）
（平均：草丈 22.5cm・葉鞘径 4.2mm　撮影 H30/4/27）

図1　定植時の葉鞘茎の太さがりん茎肥大に及ぼす影響（12 月は種）

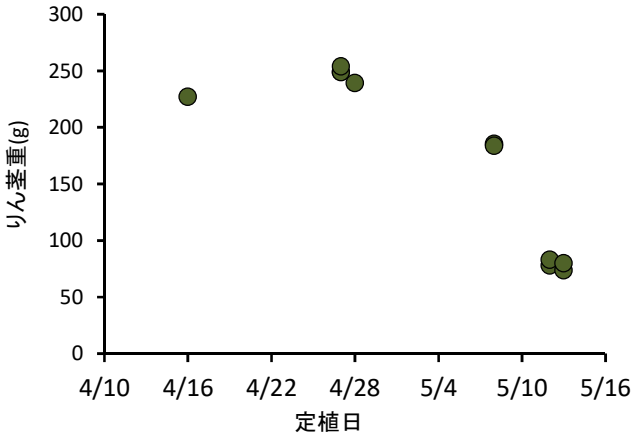


図2　定植日がりん茎肥大に及ぼす影響

注1　かん水は水田転作畑を想定した畦間かん水
畦肩までかん水・翌朝畦間に若干の水溜まり
がある程度（翌朝pF1.9～2.0）
撮影 H30/6/7

注2　実施日：5/31・6/4・6/7・6/15

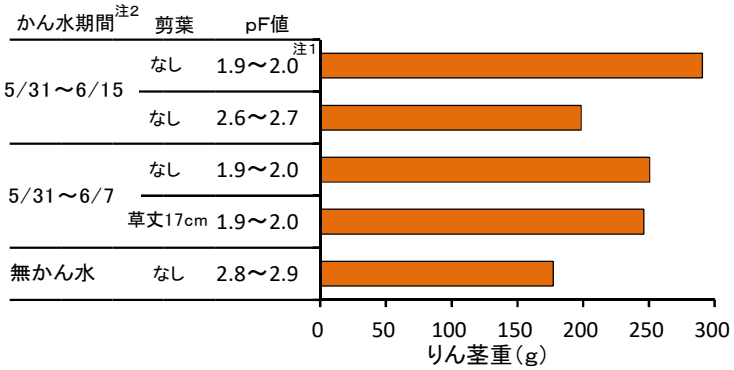


図3　土壌水分・かん水期間がりん茎肥大に及ぼす影響（H30/4/27 定植）

［その他］

研究課題名：「転作野菜2毛作」の作型及びほ場管理技術の開発
予 算 区 分：県単政策（21 世紀型）
研 究 期 間：平成 28～30 年度
発表論文等：なし